



TITLE:

イル汗國におけるモンゴル人

AUTHOR(S):

志茂, 碩敏

---

CITATION:

志茂, 碩敏. イル汗國におけるモンゴル人. 東洋史研究 1984, 42(4): 696-732

ISSUE DATE:

1984-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153923>

RIGHT:

## イル汗國におけるモンゴル人

志 茂 碩 敏

### はじめに

十三世紀の中葉、マング汗の時代、チンギス汗の孫フラグは西アジアに遠征し、モンゴリアその他の地から彼に同行した軍隊と、オゴタイ汗時代に起源を持つモンゴル帝國の西方出先機關、「アゼルバイジャン軍政府」、「ヒンドウスタン・カシミール鎮守府」、「ホラサン總督府」の諸勢力を指揮下に入れて征服活動を行ったが、諸々のやむを得ぬ事情で麾下の軍隊共々イランを中心とする征服地にそのまま居つくこととなり、ここにフラグを開祖とする西アジアのモンゴル政權イル汗國が成立するところとなった。イル汗國の中核を構成したのはフラグの遠征に際して各王家所屬の全千人隊から一定の割り當てで選拔された部族軍と、やはり割り當てられて千人隊から選拔された西方出先機關の部族軍であったが、これらの軍隊は、いずれも征服活動に際してフラグの指揮下に入つてはいたものの、本來は獨立した勢力であつて必ずしもフラグ家に從屬するものではなかった。つまり、イル汗國にはフラグ遠征時のモンゴル帝國を構成していた各王家所屬の千人隊から分枝した數多くの部族軍が並存することとなり、チャガタイ汗國やキプチャク汗國等、自家に分與された數部族の千人隊を基幹として成立した諸汗國と比し、その構成は著しく異なるものとなつたのである。イル汗國の中核を構成する軍隊は、モンゴル帝國の基幹となつていた全部族軍のイランに分枝したミニチュア版とも言えるものであつた。このようなわけで、イル汗國一代、及びイル汗國崩壞後のイランにおけるモンゴル諸部族軍の消長を明確にすることは、單にイラ

ンにおけるモンゴル人達について考察するというだけの問題に留らず、廣くモンゴル帝國全體を理解しようとする際の有力な手がかりを獲得しうる重要問題ともなってくる。

建國時の事情により、必ずしもフラグ家に直屬はしない多くのモンゴル系、トルコ系諸部族が並立する形で成立したイル汗國に内包されている分立的要素は、外敵の侵入を撃退したアバカ汗の歿後、汗位繼承争いと絡む有力部族長間の政争という形で表面化しはじめ、十三年間に五人の汗が立つという混亂狀態が続いたが、結局この政争は、一二九五年、任地のホラサン地方からアゼルバイジャン地方に進軍して汗位についたガザン汗によつて收拾され、さらにガザン汗は對立する多くの部族長（アミール）達や、彼等と結んで汗位を狙ひうる諸王達を徹底的に討滅していった。ガザン汗が對立勢力討滅活動完了後、僅か四年半で歿した後、政權は腹違いの弟オルジャイト汗、その息子アブー・サイード汗へと繼承され、一三三五年、アブー・サイード汗が歿してフラグ家の正統が絶えるとモンゴル系、トルコ系諸部族抗争の時代となり、最終的にはジャライル朝がアゼルバイジャンを支配することとなった。

イル汗國一代、及びイル汗國崩壞後のイランにおけるモンゴル人達の動向については、『集史』、『ワッサーフ史』、『オルジャイト史』、『ヘラート史記』、『選史』、『シャイフ・ウワイス史』、『集史續編』、等からかなり詳しく知ることができる。しかしながら、これらの諸史料は限られた時代や地域を扱ったそれぞれ性格の異なるものであり、イル汗國成立時からその崩壞後に至るまでを通してのモンゴル人達の動向を理解するためには、これらの諸史料をつき合せ、繋ぎ合せて整理していかなければならず、さらにやっかいなことには、これら諸史料中に登場するモンゴル人達の親子、兄弟、一族その他相互の關係が明らかでない場合が非常に多い。このようなわけで、これらの諸史料をいかに精讀しようとも、具體的な諸點が一向に判然とせず、モンゴル系、トルコ系諸部族のイル汗國一代、及びイル汗國崩壞後に至るまでの個々の消長を明確にすることはほとんど不可能なのである。

イル汗國におけるモンゴル人達の動向についてはドーソン以來百數十年、多くの研究者達によつて一應の整理がなされ

てはきたが、彼等のどの研究を見ても、諸史料中に登場するモンゴル人達の行動を彼等相互の関係を明らかにしないまま年代順に羅列するのみであり、チンギス汗時代に遡る各部族軍のイランにおける分枝の消長は全く明らかにされていない。このように、従来の研究が極めて不十分なままに終っているのにはそれなりの理由がある。それは、この史料なしにはこの問題の研究が不可能と言っても過言ではない決定的重要史料、『集史』『部族考』を全く参照しなかったことによる。「部族考」は、モンゴル帝國の基幹となつたモンゴル系、トルコ系諸部族の各部族ごとに、その出自、系統、起源説話、親族關係、習俗、生活様式、住地、移動、チンギス汗との關係、チンギス汗時代の有力アミールとその後裔達、一族達の名、チンギス汗一門の妃や側室となつた者の名、その他、廣範な年代にわたる他史料中には見られない様々の事柄が述べられている極めて貴重な史料だが、イル汗國におけるモンゴル人に關しては、イランにおける當該部族出身者として名が擧げられているだけの場合がほとんどで、しかも扱われているのがガザン汗の時代までであり、零細な史料といえる。このようなわけで、今まで「部族考」がイル汗國史研究の史料として注目されたことは全くといってよいほどなかつたが、「部族考」の記事から各部族のアミール達とその後裔達、一族達の系譜をできるだけ明らかにし、これと前述の諸史料中に見られるモンゴル人達の行動とをつき合せ、繋ぎ合せていけばイランに分枝したモンゴル系、トルコ系諸部族の消長をかなり明確にすることが可能である。

筆者は既に「部族考」を参照して五稿を著わし、限られた年代における諸部族の個々の消長について考證してきたが、さらに新たな成果をも加えて、イル汗國建國時からその崩壞後に至るモンゴル系、トルコ系諸部族の消長について論じてみたい。

## 第一章 ガザン汗に滅ばされたモンゴル諸勢力

### 第一節 モンゴル帝國の西方出先機關起源の軍隊の消長

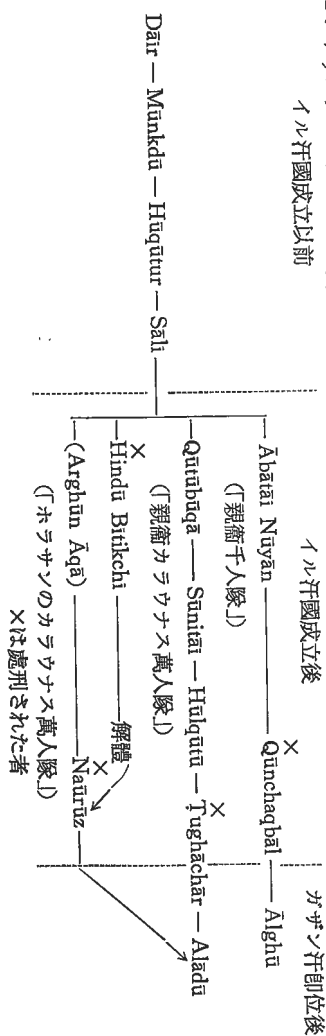
#### (1) 「ヒンドウスタン・カシミール鎮守府」起源の軍隊の消長

アバカ汗歿後の政争において數々の陰謀や裏切りを重ねながらも大きな處罰を受けずに、アルグン汗、ガイハト汗、バイド汗政權の中心にあった Tughachar は二九五年、諸王ガザンがホラサンから進軍してくるとバイド汗を裏切つてガザンのもとに投じた。Tughachar はバーリン部族の出身で、「ヒンドウスタン・カシミール鎮守府」二萬の軍隊の兵員達と現地の女との混血兒であるカラウナス達を主體に構成されたイル汗の直屬軍、「親衛カラウナス萬人隊」の初代萬人隊長 Qutluga の子であり、アルグン汗時代にこの親衛隊の第四代萬人隊長となつて以後、この軍隊を半ば私兵化して一連の政争の中心にあつたが、結局は、即位したガザン汗によって危険人物としてルムに左遷され、その數箇月後ガザン汗の放つた刺客の手で暗殺された。Tughachar とほとんど行動を共にしていた Qunchaqbal はオングラト部族出身で、祖父 Abatai Nayan がアバカ汗時代に支配していたカラウナス達を主體とするイル汗の「親衛千人隊」をアルグン汗時代以後支配していた人物であり、Qunchaqbal が一連の政争の中心人物たり得たのも Tughachar 同様、汗の直屬軍をおさえていたことによる。Qunchaqbal は最後までバイド汗に従つて捕えられ、一族の Bulghar Khatun の助命嘆願があつたがガザン汗に處刑された。

また、カラウナス達を中心に編成されたホラサン守備の軍隊、「ホラサンのカラウナス萬人隊」の支配者、イルドルキン部族の Hindu Butkai は、アバカ汗の歿後、諸王アルグンとアフマッド汗とが争つた時、ホラサン地方にいてアルグ

ソンの協力要請を断り、アルグン汗の即位後ヘラートで殺された。もう一つの「ホラサンのカラウナス萬人隊」の支配者オイラート部族の *Nauruz* は、一二八九年、アルグン汗打倒を計畫したアゼルバイジャンの *Buga* の叛逆事件に絡んでホラサン地方で諸王ガザンに叛いたが、一二九四年、ガザンのもとに降った。*Nauruz* が叛いた時、彼が支配していた軍隊中にはアルグン汗時代のはじめに *Hindu Butikchi* が處刑されて解體した「ホラサンのカラウナス萬人隊」の殘黨も含まれていたと考えられ、*Nauruz* が諸王ガザンに降るに及び、二つの「ホラサンのカラウナス萬人隊」系統の軍隊の多くはガザンの支配下に入ることになった。*Nauruz* は諸王ガザンのもとに降った後、彼の即位に盡力して貢獻したが、一二九七年、ガザン汗の斷固たる決意の前に一族、郎黨共々處刑された。

以上のように、「ヒンドウスタン・カシミール領守府」「二萬の軍隊を持つカラウナスの軍隊はイル汗國成立後、「親衛カラウナス萬人隊」、「親衛千人隊」、「ホラサンのカラウナス萬人隊」という汗の親衛軍や邊境守備軍に編成され、アバカ汗歿後の政争においてはアゼルバイジャン、ホラサンにおける中心勢力であったが、アルグン汗時代のはじめ、「ホラサンのカラウナス萬人隊」の萬人隊長 *Hindu Butikchi* がヘラートで殺され、次いで「親衛カラウナス萬人隊」の萬人「ヒンドウスタン・カシミール領守府」の萬人隊の變遷



Xは處刑された者

隊長「Jugachar」と「親衛千人隊」の千人隊長「Qunchaqbal」が相次いでガザン汗に處刑され、さらに、ガザンのもとに降つていた「ホラサンのカラウナス萬人隊」の支配者「Nauruz」も一族、郎黨共々ガザン汗に處刑されて、「ヒンドゥウスタン・カシミール鎮守府」起源の軍隊は解體、再編成され、後述するガザン汗のアミール「Aladu」や「Alghu」が支配することとなつた。また、「Nauruz」が一族、郎黨共々處刑されたことは、第四代「ホラサン總督」であつた父「Arghun Aqa」以來の傳統が斷絶したことをも意味する。

## (2) 「アゼルバイジャン軍政府」起源の軍隊の消長

「アゼルバイジャン軍政府」の軍隊は遠征軍の總司令官、スニート部族の「Churmaghun」率る「第一萬人隊」、オルクヌート部族の「Yaka Yisur」率る「第二萬人隊」、ウイグル、カルルク等からなる「Malikshah」率る「第三萬人隊」からなつていたが、「第三萬人隊」は萬人隊を繼承した「Malikshah」の二人の息子が相次いで處刑され、フラグ汗時代の一二六〇年、解體、分割された。「第一萬人隊」は「Churmaghun」の後、ベスート部族の「Baiju」が萬人隊長職を繼ぎ、彼が一二五九年、フラグに處刑された後、「Churmaghun」の子「Shiramun, Baiju」の子「Adak」と萬人隊長職は「Churmaghun, Baiju」の系統に交互に繼承されていったが、アフマッド汗と諸王アルグンとが争つた時、「Shiramun」の子「Ebutkan」がアフマッド汗の有力アミールとしてアルグン汗の即位後處刑され、「第一萬人隊」の主力は「四つの千人隊」を一單位とする二つの軍團に分割され、アルグンの即位に貢獻したジャライル部族の「Ghazan」と王族の「Burulghi Qiyatai」に與えられた。「第一萬人隊」はアバカ汗歿後の政争に絡んで二つに分割され、全く別系統の者達の支配下に入つたのである。「四つの千人隊」の長「Ghazan」は一族の「Buga」がアルグン汗に對する叛逆を企て、諸王ジュシュカールの擁立を計畫した時これに同調して一二八九年處刑された。もう一人の「四つの千人隊」の長「Burulghi Qiyatai」はガザン汗の即位後に處刑されている。ガイハト汗時代、兄「Ghazan」の軍隊を繼承した「Aina Bik」もガザン汗の即位直後に起つた諸王スカ・アルスランの

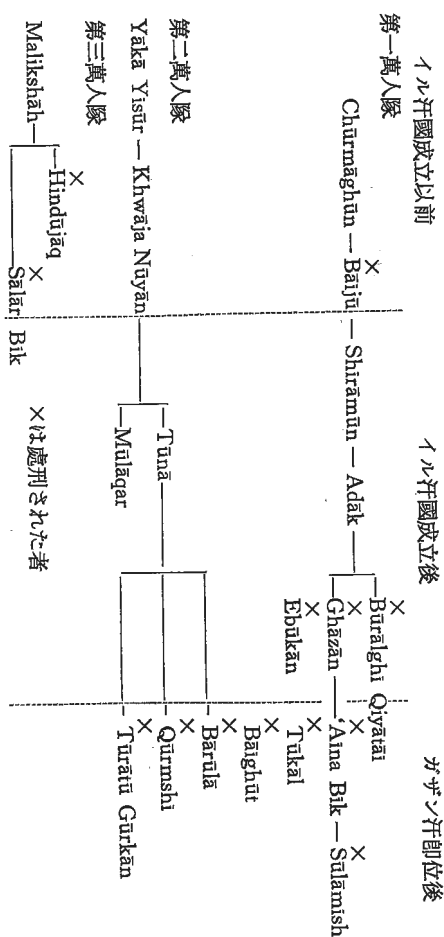
叛亂事件の中心人物の一人として處刑された。

諸王スカ・アルスランの叛亂は、ガザン汗の即位後聞もない一二九六年のはじめ、「第二萬人隊」の初代萬人隊長 *Yisur* の會孫で、バイド汗側について諸王ガザンに對抗した萬人隊長 *Batila* が命ぜられてホラサンに出兵する途次同様にホラサン出兵を命じられた諸王スカを擁して叛亂を起したのにはじまる。*Batila* は戦死し、スカは處刑されたが、この報を得たガザン汗は *Batila* の兄弟の *Gurmsh* と *Turatu Gurkan* の處刑を斷行し、ここに「第二萬人隊」は完全に解體された。これを知ったアミール達が諸王アルスランのもとに結集して叛いたのがアルスランの叛亂で、叛亂の首謀者 *Tukal* は *Chumaghun* と共にイランにやってきたアルラト部族のアミールの後裔で、フラグの征服活動時から活躍していた古參のアミールであり、彼が支配していた軍隊の基幹が「アゼルバイジャン軍政府」起源のものであることは疑いない。もう一人の中心人物が「アゼルバイジャン軍政府」の「第一萬人隊」起源の「四つの千人隊」の長、ジャライル部族の *Aina Bik* であることは既に述べたとおりであり、諸王スカ・アルスランの叛亂が「アゼルバイジャン軍政府」の「第一萬人隊」、「第二萬人隊」起源の軍隊の支配者達を中心に起されたことは明瞭である。ホラサンからアゼルバイジャンに進軍し、バイド汗を倒して即位したガザン汗はアゼルバイジャンに政權の基礎を確立せんと、「ヒンドウスタン・カシミール鎮守府」起源の軍隊である「親衛千人隊」の長 *Gunchaqbal* の處刑、「親衛カラウナス萬人隊」の長 *Tughachar* のルム左遷、「アゼルバイジャン軍政府」の「第一萬人隊」起源の「四つの千人隊」の支配者 *Batila* *Qiyat* の處刑を相次いで斷行し、アバカ汗歿後の政爭の中心にあったフラグ遠征時以前からの傳統を有する舊勢力を次々と排除していったが、これをまのあたりに見た「アゼルバイジャン軍政府」の「第一萬人隊」、「第二萬人隊」起源の軍隊の支配者達はガザン汗からホラサン出兵を命ぜられるに及び、これに反發して叛亂を起したのである。*Tukal* が處刑され、逃れた *Aina Bik* も處刑され、*Tughachar* も暗殺された。翌一二九七年には *Chumaghun* の孫 *Baighur* が處刑されている。*Baiju* の孫 *Sulamish* は、*Aina Bik* から繼承した軍隊を基幹にルムの萬人隊長となったが、結局は叛いて捕えられ、一二九九年處



刑された。この「第一萬人隊」起源の軍隊は最終的に解體された。

「アゼルバイジャン軍政府」起源の軍隊の變遷



以上、(1)、(2)で述べてきたように、アバカ汗歿後の一連の政争の中心にあったのは、「部族考」を参照しての考證によりはじめてイル汗國成立後の動靜が知れる「ヒンドウスタン・カシミール鎮守府」、「アゼルバイジャン軍政府」、「ホラサン總督府」等モンゴル帝國の西方出先機關起源の軍隊の支配者達であり、これら舊勢力は、ホラサンからアゼルバイジャンに進軍して汗位についたガザン汗と眞つ向から對立することとなり、アゼルバイジャンに確固たる政權の基礎を確立せんとする彼の斷固たる決意の前に徹底的に解體、改易されたが、西方出先機關起源の軍隊の支配者達を中心に汗位繼承争いと絡んだ政争がくり返される間に、フラグ遠征軍起源の諸部族の萬人隊、千人隊の支配者達やその一族達も次第にこの政争に巻き込まれていき、ガザン汗時代以前にも、ガザン汗の即位後にも多くのアミール達が處刑され、その軍隊を解體

されている。次に、西方出先機關起源の軍隊の支配者をも含めて、アバカ汗歿時の一二八二年から一二九九年、ガゼン汗の對立勢力討滅活動完了時までには減ぼされて軍隊を解體された諸部族のアミール達について部族別に整理してみよう。

## 第一節 アバカ汗歿後からガゼン汗の對立勢力討滅活動完了時までの諸部族の消長

1 バーリン部族：「ヒンドウスタン・カシミール鎮守府」の軍隊を支配した *Qara Nūyān* の甥 *Qurubuga* がフラグ汗時代の末、「ヒンドウスタン・カシミール鎮守府」の軍隊の後身である「親衛カラウナス萬人隊」の初代萬人隊長となったが、一二六五年、キプチャク汗國の軍隊と戦って戦死した。彼の兄弟の *Jankur*, *Takna*, *Jankur* の息子 *Buralghī* は站赤監視官 (*ataghau*) を務め、*Takna* はアバカ汗歿後の政争にも關わりを持ち、一二九二年に歿した。*Qurubuga* の子 *Tughachar* はアルグン汗時代に「親衛カラウナス萬人隊」の第四代萬人隊長となつて一連の政争の中心にあつたが、ガゼン汗の即位後ルムに左遷され、當地で暗殺された。彼の暗殺後、一族の者達の大きな活動はほとんど見られず、僅かに *Buralghī* とその子 *Charuq* がガゼン汗の歿時、掌櫃官 (*sakurchu*) であったことが知れるのみであり、オルジャイト汗時代のはじめ *Buralghī* がルム地方での罪を問われて處刑されて以後、この部族出身者の名は傳えられていない。

2 オンギラート部族：*Dei Nūyān* (特薛禪) の一族 *Abatai Nūyān* がフラグの征服活動に従つた後アバカ汗の「親衛千人隊」の長となり、この軍隊の支配權をアルグン汗時代に受けついだ孫の *Qunchaqbal* は *Tughachar* と共にアバカ汗歿後の一連の政争の中心にあつたが、一二九五年、バイド汗に仕えて諸王ガゼンと對立し、捕えられて處刑された。その數箇月後、同族の *Mūsa Gurkān* が諸王アルスランの叛亂に加わり、以後この部族のアミールの活動は全く傳えられていない。*Mūsa Gurkān* と *Tukal* と *Aina Bık* 同様處刑されたと考えられる。

3 スニート部族：「アゼルバイジャン軍政府」の「第一萬人隊」の初代萬人隊長 *Churmaghūn* (緯兒馬罕) の子 *Shirāmūn* は、一二五九年、處刑された第二代萬人隊長 *Bajir* の後をうけて第三代萬人隊長となったが、息子の *Ebükrān* は

フマッド汗と諸王アルグンとが争った時アフマッド側につき、一二八四年、アルグン汗の即位直後に處刑された。別の息子 Baighit も一二九七年、ガゼン汗に處刑され、以後 Churmaghun の後裔の活動は全く見うけられない。

4 ベースト部族: Jebe (哲別) の一族は、Churmaghun の遠征に千人隊長として加った Baïja は「アゼルバイジャン軍政府」の「第一萬人隊」の第二代萬人隊長となり、フラグの征服活動時にも活躍したが、一二五九年、ルムにおける戦功を誇ったという理由でフラグに處刑された。息子の Adak は千人隊長からアルグン汗時代に萬人隊長となった。Adak の息子 Sūlamish はガゼン汗の對立勢力討滅活動に従って、諸王アルスランの叛亂鎮定やルムの叛將 Baïja 追討等に功を立て、「Aina Bik の處刑後に「第一萬人隊」起源の「四つの千人隊」を繼承した。さらに、この軍隊を基幹にルムの萬人隊長となったが、結局はガゼン汗に叛いて一二九九年に處刑され、「第一萬人隊」起源の軍隊は最終的に解體された。Jebe の弟 Munkdu Sar は「ヒンドウスタン・カシミール鎮守府」の第二代萬人隊長となり、息子の D'his は一二六五年、諸王アバカが汗位につくため任地のホラサンに戻る時、バドギス地方に留って、「ヒンドウスタン・カシミール鎮守府」の軍隊の後身である「ホラサンのカラウナスの萬人隊」の一部を支配した。彼の後裔の活動は知られていない。また、Jebe の後裔の Zanki はアルグン汗時代 Buga の叛逆計畫に同調して處刑された。同じく Jebe の後裔の千人隊長 Shan-gasūn は一二九五年、バイド汗のもとから諸王ガゼンのもとに來降したがその後のことは知られていない。結局ベースト部族出身者の活動は、一二九九年 Sūlamish の處刑後は見うけられない。

5 ジャライル部族: フラグに従ってきた Ulkai Qurchi の子 Buga はアバカ汗の側近となった後、請われてアフマッド汗に仕えたが、アフマッド汗を裏切つてアルグン汗擁立の立役者となり、一二八四年のアルグン汗の即位以後強盛を誇った。Buga と行動を共にした弟の Arūq や一族の Ghazān も同様であり、Ghazān はアルグン汗の即位後、「アゼルバイジャン軍政府」の「第一萬人隊」起源の「四つの千人隊」の長となった。Buga はその後アルグン汗と不和になり、諸王ジュッシュカトプの擁立を計畫して發覺し、一二八九年處刑された。この時彼に同調した Arūq や Ghazān も同様に處刑

された。Chazan の弟 'Aina Bik はガイハト汗時代、兄の支配していた「四つの千人隊」を継承したが、ガザン汗時代の一二九六年、諸王アルスランの叛亂事件の中心人物として捕えられ、處刑された。以後、Bugā の一族の活動は見うけられない。

6 オルクヌート部族：チンギス汗時代の千人隊長 Kinkiyadai (經吉牙歹) の一族である「アゼルバイジャン軍政府」の「第二萬人隊」の初代萬人隊長 Yaka Yisur の曾孫で、やはり萬人隊長であった Barūta は、バイド汗と諸王ガザンとが對立した時バイド汗側につき、ガザン汗即位直後の一二九六年、ホラサン出兵を命ぜられて當地に向う途中、諸王スカを擁して叛亂を起したが戦死した。この直後、兄弟の Qurmshī, Turatū Garkan もガザン汗に處刑され、「第二萬人隊」起源の軍隊は完全に解體した。

7 オイラート部族：第四代「ホラサン總督」Arghūn Āqā の子 Naūruz や弟の Lakai はアバカ汗歿後の政争に初期から關わりあいを持っており、一二八九年、アゼルバイジャンにおける Bugā の叛逆事件に絡んでホラサンで諸王ガザンに叛いた Naūruz は一二九四年ガザンのもとに降った後、バイド汗と對立したガザンを助けて彼の即位に盡力し、バイド汗のもとにあった Lakai とも對立した。結局はガザン汗即位後の一二九七年、彼等は一族郎黨共々ガザンの斷固たる決意の前に殺され、以後、オイラート部族のこの系統のイル汗國における活動はほとんど見うけられない。

8 イルドキン部族：フラグの征服活動に活躍し、「ホラサンのカラウナス萬人隊」の萬人隊長となった Hindu Butukchi はアフマッド汗と諸王アルグンとが争った時、アルグンの協力要請を受けたが、前約に反して協力しなかったため、アルグン汗の即位後ヘラートで殺された。

9 ジャライル部族：ギョク汗歿後のトゥルイ統とオゴタイ統の汗位繼承争いに際し、マング汗擁立に盡力した Mun-kasar (忙哥撒兒) の子 Hindūqār Nūyān はフラグの西アジア遠征に際して萬人隊長として同行し、アバカ汗時代のシリア遠征に加わったことが知られている。息子 Qurmshī は Bugā と共に諸王ジュシェカプの擁立を計畫して處刑さ

れ、Hindagar の萬人隊を繼承していた別の息子 Itimār はガイハト汗時代の末、諸王バイドの擁立に働き、その後、バイド汗と諸王ガザンとが争った時にガザンのもとに來降した。Itimār に關するその後の記事はないが、彼の兄弟の Shidwān, Ibbāq が一二九七年 Nauruz の一族が滅ばされた時に處刑されたことが知られている。以後、ジャライル部族のこの系統の活動は全く見うけられない。

10 コンコタン部族：Munklik Ichige (蒙力克額赤格) の後裔、萬人隊長 Tudajū Yarghuchi はジャライル部族の Itimār 同様ガイハト汗時代の末、諸王バイドの擁立に働き、バイド汗に従っていたが、諸王ガザンと對立して杖刑に處されホラサンに送られた。これ以後この部族出身者の活動は見うけられない。

11 ウリヤンカン部族：Jalme [者勒篋] の後裔、千人隊長 Natin Ahmad はガイハト汗の即位後、一時アルラト部族の Tūkal の軍隊を受けついでが、ガザン汗時代に息子の Sarkis が Tūkal と共に諸王アルスランの叛亂に加わり處刑された。その後、この部族出身者で行動が知られているのは、アブー・サイード汗時代の一二一九年、後述する Irinjīn・Qumshī の叛亂の際、叛軍に加わって處刑された千人隊長 Qarūna Chubān のみである。

12 アルラト部族：Būchi [博爾朮] の一族 Chaghatai Buzurg は Chūrmaghūn に千人隊長として同行し、一族の Bīklamish や Tūkal はフラグの征服活動に活躍したことが知られている。その後 Bīklamish の子 Ujān は Būqa の諸王ジュシユカーフ擁立計畫に加わって處刑され、Tūkal はグルジスタンに本據をおきながらアバカ汗歿後の政争に加わって萬人隊長となり、ガザン汗即位後の一二九六年、諸王アルスランの叛亂の首謀者として處刑された。「アゼルバイジャン軍政府」起源の軍隊を支配する古參のアーミール Tūkal の處刑後 Būchi の後裔達、一族達の活動は見うけられない。

13 オイラート部族：Qutūqa Biki (忽都合別乞) の孫 Būqatimār はフラグ汗の時代に萬人隊を支配し、息子 Jaqar Gūrkan, 孫の Targai Gūrkan へと受けつがれた。Targai Gūrkan は一二九五年、諸王ガザンとバイド汗とが對立した時、息子の Kūktai Bahadur と共にバイド汗につき、ガザン汗の即位後、いくつかの千人隊共々シリアを経てマムルーク朝に逃

亡した。以後、オイラート部族のこの系統の活動は見あたらない。

14 ケレイト部族…『集史』「アフマッド汗本紀」世系表その他に名が見うけられる萬人隊長 Bügü の孫 Ghazan はガザン汗の即位後、諸王アルスランの叛亂に加わって處刑された。この亂以後 Ghazan の叔父 Shadi をはじめ Bügü の一族の活動は全く見うけられず、Bügü の萬人隊は解體されたと考えられる。

15 スニート部族…千人隊長 Temüdar (帖木迭兒) の後裔 Būgdai Akhachi はアバカ汗歿後の政争の渦中において、最後はバイド汗のもとを離れ、ホラサンから進軍してきた諸王ガザンのもとに投じたが、それ以後のことは全く知られていない。

16 ジャライル部族…古くからルム方面に駐屯していた Tanji の息子 Balta はガザン汗の即位後、召喚命令に應じないという理由で追討軍を指し向けられて殺された。

17 ジャライル部族…Mūgali Kūyank (木華黎國王) の後裔、千人隊長 Jāūqūr はアバカ汗が歿した直後、Tughachar, Qūnchaqbal と共に親アルグン派の主要人物として名が挙げられているがアルグン汗の即位後の行動は知られていない。

その他の Mūgali の後裔達の具體的な活動も知られていない。

18 その他…ウイグル、カルルク等からなる Churmāghūn 遠征軍の「第三萬人隊」の長 Malikshah の息子で萬人隊を受けついで Hindūjiq は罪を得て Arghūn Aqa の手で處刑され、彼の後を繼いだ兄弟の Salār Bīk もフラグ汗時代の一二六〇年、シリア作戦における敗走の責任を問われて處刑され、その軍隊は解體された。また、オングート部族、アダルクキン部族、フーシン部族、バルラス部族出身者の行動もごく断片的な記事に見うけられるが、これら諸部族のガザン汗時代以降の活動は伝えられていない。Churmāghūn に従ってイランにやってきたマングト部族の Munka Qalja (蒙可合勒札) の子 Mūlqar Qalja の後裔達の活動も知られていない。

以上、本章で述べてきたように、アバカ汗歿後の政争の渦中にあったアゼルバイジャンを中心とする諸部族の軍隊は、西方出先機關起源のものも、フラグ遠征軍起源のものも、ガザン汗に討たれて解體され、後代まで及んでいるものはほとんど無いことが判明した。そして、本論では詳しくは觸れていないが、このガザン汗の對立勢力討滅活動の過程で、諸部族のアミール達と結んで汗位を望みうる有力な諸王達もガザン汗の後繼者である弟のハルバンダ以外はほとんど總て滅ぼされてしまったのである。

さて、次に、建國時以來の諸部族の軍隊を解體、改易した後に成立したガザン汗政權の中核はいかなる者達によつて構成されていたかについて整理し、ガザン汗政權中核のアミール達やその後裔達、一族達のガザン汗歿後の状況を見ていこう。ガザン汗政權中核のアミール達のうち、ホラサンから諸王ガザンに従つてきた者達と、アゼルバイジャンにいて、ホラサンから進軍してきたガザンのもとに投じて仕えた者達の大きく二つに分けて考えてみたい。

## 第二章 ガザン汗政權中核のアミール達

### 第一節 諸王ガザンと共にホラサンからアゼルバイジャンに進軍してきた者達

1 マングト部族…ホラサン地方にいた諸王ガザンを助け、一二八九年 *Nahid* の叛亂時からガザンがアゼルバイジャンに進軍して汗位につき、對立勢力討滅活動を遂行していった間、東奔西走して働き、ガザン汗政權隨一の有力萬人隊長となつた *Qutughshah* は千人隊長 *Jadai* (者名) *Nizjan* の孫で、古くからホラサン地方にいてアバカ汗の子、諸王アルグンやその子ガザンに仕えていたガザン子飼いのアミールであつた。一二七四年、ガザン三歳の時にその身邊にいたことが知られている。 *Qutughshah* の兄弟達、一族達もガザン汗の即位後、萬人隊長、千人隊長として政權の中核を構成した。 *Qutughshah* の父 *Mangūdai* は「部族考」中に「マングト部族の千人隊長」とあるのみで具體的な行動は史料中には見

うけられないが、フラグの遠征に同行し、建國當初からホラサンにいた人物と考えられる。Mangqudaiの兄弟で Qutlu-gshah の叔父 Hulgutu Qurchi はアバカ汗時代に「親衛カラウナス萬人隊」の第三代萬人隊長となり、二人の息子はガザン汗時代、箭筒士 (qurchi)、主馬頭 (akhachi) としてガザン汗に仕えた。

ガザン汗時代に續くオルジャイト汗時代のはじめ Qutlu-gshah はやはり有力で、アミール筆頭に列され、息子の Qarantjuq が二十位に列された。しかし、一三〇七年、ギーラーン征討作戦の中で Qutlu-gshah は戦死し、彼の息子で千人隊長の Shibaji も敗戦責任追求のクリルタイにおいて罪を問われ、長期間にわたる父の功績により死一等を減ぜられて杖刑に處されるに留ったが、Qutlu-gshah の萬人隊の支配権は後述するスルドス部族の Chubai の手に移った。この時以後、マングト部族のイル汗國史上における大きな活動はほとんど見うけられなくなり、第二十位に列されていた息子の Qarantjuq の具體的な行動も全く知られていない。僅かに、オルジャイト汗時代の一三一三年、ホラサンに向ったオルジャイト汗の息子諸王アブー・サイードに同行した者達の中に Qutlu-gshah の息子 Sai Qutlu-g の名が見えるのと、アブー・サイード汗時代及び彼の歿後の政争を述べた記事中に、別の息子 Eqbalshah や Jalal がグルジスタン及びアゼルバイジャン方面にいたことが全く断片的に伝えられているだけである。

2 バルト部族・チンギス汗時代の Qadan (合答安) の後裔で、ホラサン地方で諸王ガザンに従って活躍し、ガザン汗の即位後に萬人隊長となった Satalmish の祖父 Juqaghan は、ガザンの父でホラサン地方にいた諸王アルグンの師父 (atabek) であり、Satalmish の父 Buralghai はアルグンの乳兄弟 (dukatash) であった。つまり、Satalmish は祖父、父がホラサン地方において諸王アルグンに「師父」、「乳兄弟」として仕え、アルグン、ガザン親子と極めて密接な関係にあったのに引き續いて、アルグンの即位後もホラサン地方で息子のガザンに仕えていたガザン子飼いのアミールであったわけである。Satalmish が一三〇一年、第二回シリア作戦の途中に歿した後は、彼の妻を娶った甥の Tughai Gürkân の活動が断片的に知れるのみでバルクト部族出身者の大きな活躍は見うけられない。



3 ウリヤンカン部族：Subtai (速不台) Bahadur の後裔達、一族達はフラグに同行してきた Kuka Ilkai の子、萬人隊長 Hargasun を中心にアゼルバイジャンを本據としていたが、一族の者達のうち、アバカ汗の妃で幼少時代のガザンを己のオルドで養育した大 Bulghān Khātūn のオルド長や家の子達は、一二七九年、アバカ汗が東南邊境に侵寇するカラウナス征討のため出軍した時彼女に同行した。そしてその後アバカ汗がハマダン地方で歿し、大 Bulghān Khātūn がホラサン地方にいた息子アルグンの妃となると、當地でアルグン、ガザン親子に仕え、一二八四年、アルグンが汗位につくため大 Bulghān Khātūn 共々アゼルバイジャンに向った後も引き續いてガザンに仕えた。このようなガザン子飼いのアミールとして Kuka Ilkai の甥 Ashbūga, Subtai の孫 Qutughkwāja, Kūnjak, 一族の Bayanjār の名が知られている。一二九五年、諸王ガザンがバイド汗と對決するためにアゼルバイジャンに進軍した時に彼等も同行し、バイド汗のもとをいち早く離れてガザンのもとに來降してきた萬人隊長 Hargasun 等アゼルバイジャンに留っていた一族と合體した。ガザン汗時代 Subtai の後裔、一族で活躍したのは Subtai の孫、萬人隊長 II Basmish とホラサン以來の子飼いのアミール Bayanjār の二名であり、Bayanjār はルムの有力アミールとなったが、一二九八年、叛亂を起した Sulamish に殺された。II Basmish の名はガザン汗の即位直後にはじめて史料中に見られるが、もとはホラサンの諸王ガザンのもとにいて、ガザン汗の即位後、フラグの遠征時に父 Kuka Ilkai に同行してきた高齡の萬人隊長 Hargasun に代つてウリヤンカン部族の萬人隊を支配することになったと考えられる。II Basmish はオルジャイト汗時代のはじめ、アミール第十四位に列され、ガザン汗時代に引き續き有力であったことが知れるが、その具體的活動は全く傳えられておらず、また Subtai の後裔達、一族達のガザン汗歿後の目立った活動は見うけられない。僅かに、一二一三年、諸王アブー・サイードがホラサンに向った時、II Basmish の子 Yaghlad と II Basmish の兄弟 Baimish Qushchi の子 Muhammad が同行したとと、Muhammad のその後の行動が斷片的に傳えられているだけである。

4 バヤウト部族：アバカ汗の妃で、幼少時代のガザンを己のオルドで養育し、後、ホラサン地方でアバカの息子アルグ

ン汗の妃となったバヤウト部族出身の大 Bulghān Khātun の一族の Nugai Yarghuchi とその息子 Tugtimur, Alghu, Isanbūga はホラサン地方で幼少時代のガゼンに仕え、一二八九年、Nugai Yarghuchi が Nauruz の叛亂事件で殺された後も息子達はホラサン地方で諸王ガゼンを助けて活躍した。これらガゼン子飼いのアミール達のうちガゼン汗の即位後 Tugtimur が萬人隊長、Alghu が親衛千人隊長となってホラサンを本據地とした。續くオルジャイト汗時代もバヤウト部族のアミール達はホラサンにあり、Alghu はアミール第十三位に列されて萬人隊を支配し、諸王アブー・サイードの師父となり、一族の Ramazan Gurkan がアミール第十九位に列された。Alghu はオルジャイト汗時代の末、諸王アブー・サイードの師父となり、アブー・サイード汗時代初期までの活動が断片的に知られ、息子 Daulatshah のアブー・サイード汗に仕えての活動も知られている。また、アブー・サイード汗歿後の諸勢力の抗争を傳えた記事中にも Alghu の別の息子 Artugshah の名が見うけられる。

5 クインタール部族・クヒスタンの軍政長官 (shahna) Taragai の子 Mūtai は父同様クヒスタンを本據地とし、一二八九年 Nauruz の叛亂時以來ホラサン地方で諸王ガゼンに仕えて活躍したことが傳えられている。Mūtai の一族 Būga Qurchi はアバカ汗時代の末、ホラサン地方でガゼンの父、諸王アルゲンに仕えており、Mūtai も Nauruz の叛亂時以前からガゼンに仕えていた子飼いのアミールであったと思われる。Mūtai はガゼン汗の即位後、萬人隊長となって重要作戦に活躍したが、續くオルジャイト汗時代となると、その初期にクヒスタン地方にいたことが知れるのみである。Mūtai の後裔のイル汗國時代の活動は、二人の息子 Rustam と Hinktimur が一二三三年、諸王アブー・サイードに従ってホラサンに出かけたことが知られているだけだが、アブー・サイード汗の歿後にも彼の別の息子 'Abdallah やその子 Saralmish Bīk がクヒスタンに據っていたことが傳えられている。また、Mūtai の一族 Samaghar Nūyān の子 'Arab はガゼン汗時代以後ルムに駐屯していたが、アブー・サイード汗時代のはじめの一二三九年 'Irūjin・Qurmshī の叛亂事件に絡んで殺された。

6 トトカリウトタール部族：「ヒンドゥスタン・カシミール鎮守府」第四代萬人隊長 *Salī Nūyān* の子 *Aladū* と *Abish-*  
*qā* はホラサン地方にあって古くから諸王ガザンを助けて行動し、ガザン汗の即位後 *Aladū* はかつて父が支配していた  
 上述の軍隊に起源を持つ「親衛カラウナス萬人隊」の第五代萬人隊長となり、分散していたタタール部衆をも合せてホラ  
 サンを本據地とし、弟の *Abishqā* はルムの有力アミールとなった。オルジャイト汗時代、*Aladū* の子 *Bakut* はアミール  
 第十五位に列され、父の後を受けてホラサンの有力萬人隊長となり、*Abishqā* はアミール第二十位に列されて前代同様  
 ルムに駐屯していた。アブー・サイード汗時代以降は兩者とも次第にアブー・サイード汗に對して獨立的傾向を強めてい  
 き、*Abishqā* は一三一九年、*Iringin*・*Qurnshi* の叛亂事件の際に叛軍側について處刑され、ホラサン地方でアブー・サ  
 イード汗に叛いた *Bakut* は一三二〇年、内輪めめの中で殺された。また、*Salī Nūyān* のいこで、ディアル・パクル  
 方面にいた *Durbai* の後裔 *Tinkiz* がガザン汗時代に千人隊長となったが具體的な行動は知られていない。

7 オロナル部族：千人隊長 *Badai* (巴歹) *Tarkhān* の後裔 *Sadaq Tarkhān* と *Khwarazmi Tarkhān* はホラサン地方  
 で諸王ガザンに従って活躍し、*Sadaq Tarkhān* はガザン汗の即位後、東南邊境軍司令官となつてケルマン、ファールス  
 方面に駐屯した。また、千人隊長 *Qishliq* (乞失里克) の後裔、千人隊長 *Aghutai Tarkhān* はガザン汗時代、シリア遠征  
 時の敗戦責任を問われて處刑された。オルジャイト汗時代以降のオロナル部族の活動はほとんど伝えられておらず、アブ  
 ー・サイード汗時代のはじめの *Khwarazmi Tarkhān* の行動が斷片的に知れるのみである。

8 ジャライル部族：*Bala* (巴剌扯兒必) の後裔 *Nūrin Aqa* はアルグン汗時代に *Naurūz* の叛亂に對する援軍としてホ  
 ラサンに派遣されて以後、諸王ガザンを助けて活躍し、ガザン汗の即位後に北方邊境軍司令官となつてガザン汗時代の末  
 年に歿した。息子の *Baidu* はオルジャイト汗時代のはじめアミール第二十一位に列されたが、具體的な行動は伝えられ  
 ていない。別の息子 *Nikrūz* はオルジャイト汗時代の一二三三年、諸王アブー・サイードに同行してホラサンに行き、ア  
 ブー・サイード汗即位後の活動も伝えられている。*Nikrūz* の息子 *Suljānshah* はアブー・サイード汗歿後の諸勢力抗爭

の中で殺され、以後、ジャライル部族のこの系統の活動は見うけられない。

9 ナクズ部族：千人隊長 Tughril (納噶脫幹哩勒) の後裔 Qara とその息子 Sutan はホラサン地方で諸王ガザンに従って行動し、ガザン汗の即位後 Sutan は千人隊長となった。續くオルジャイト汗時代のはじめ Sutan はアミール第十位に列されてディアル・バクルの支配にあたり、アブー・サイード汗時代にも當地にあつて Irinja・Qurmshi の叛亂や Chubān の叛亂に際してはアゼルバイジャンに駆けつけてアブー・サイード汗に協力した。彼の息子 Tughai や Qara Muhammad のオルジャイト汗時代の活動及び、別の息子 Ibrahimshah や Tughai の子 Arabshah のアブー・サイード汗歿後の行動も知られている。

10 ジャライル部族：Ünk Khan (王罕) のもとからチンギス汗の妻 Borte Fujin を連れ歸つた Sapa の子 Sartaq はホラサン、マザンダランにおいて諸王アルグンの幼少時代にそのオルド長を務めたが、息子の Qachar もホラサン地方でアルグンの子、諸王ガザンに仕え、ガザン汗の即位後、「アゼルバイジャン軍政府」の「第一萬人隊」起源の千人隊を與えられた。彼及びその後裔達の具體的な活動は知られていない。

## 第二節 ホラサンから進軍してきたガザンのもとに來降してガザン汗政權に組み込まれた者達

1 スルドス部族：一二九五年、ホラサンからアゼルバイジャンに進軍してきた諸王ガザンのもとに來降した Chubān は一二七七年、マムルーク朝のバイバルスの急襲によりルムで戦死した萬人隊長 Tudān (Sughan Shira 鎖兒罕失刺の曾孫) の孫であり、ガザン汗の對立勢力討滅活動に活躍し、シリア遠征時には萬人隊長として功を立てた。Tudān の兄弟で、フラグ汗時代からの古參のアミール Uratimur Idachi は古くからホラサン地方にあつて諸王ガザンに仕えて活動したが、ガザン汗即位後の行動は傳えられていない。高齢の Uratimur Idachi の後をうけ、來降して功を立てた Chubān がスルドス部族の萬人隊を支配したと考えられる。Tudān や Uratimur Idachi の兄弟でフラグの征服活動時以來活躍した有力

アミール *Surjaq Nuryān* の孫 *Yaman* もガザン汗時代のシリア遠征の際、萬人隊長として加わっている。ガザン汗時代、スルドス部族の有力アミールとしてその活動が知られているのは *Chubān* と *Yaman* の二名だが、オルジャイト汗時代以降は *Chubān* 一族の活動が目まじしい。*Chubān* はオルジャイト汗時代のはじめアミール第二位に列され、一三〇七年、ギーラーン征討戦で戦死したアミール筆頭の *Qutughshāh* の萬人隊を繼承してさらに強力になり、オルジャイト汗の歿後、幼少のアブー・サイードの即位式は彼を中心に舉行された。アブー・サイード汗時代はじめの一三一九年、彼に反撥したケレイト部族の *Irjinj*・*Qurmshī* の叛亂事件を制壓した後は *Chubān* 一族の強盛は決定的となったがやがてこの強盛が成人に達したアブー・サイードとの對立を招くこととなり、一三二七年 *Chubān* はヘラートで殺された。この間に息子達の何人かも處刑されたが、スルドス部族はまだまだ強力で、アブー・サイード汗歿後の諸勢力抗争の中にあつて *Chubān* の孫 *Hasan Kuchek*, *Malik Ashraf* 等がアゼルバイジャンの支配權をめぐって後述するジャライル部族の *Husain Gürkān* の後裔達と最後まで争った。

2 ケレイト部族：アフマッド汗と諸王アルグンの汗位繼承争いの中で暗殺されたアフマッド汗女婿の有力アミール *Ali-nāq* の子 *Qurmshī* は、アバカ汗歿後のイル汗國宮廷をめぐる一連の政争の中心にあつた *Tughachār*, *Qunchaqal* 等とは對立する立場にあり、アルグン汗の歿後、*Tughachār* 等が推す諸王バイドに對して *Chubān* と共に諸王ガイハトを支持してその即位に貢獻した。その後、ガイハト汗が諸王バイドに倒されると *Chubān* と共にホラサンから進軍してきた諸王ガザンのもとに投じ、ガザン汗時代には千人隊長として活躍した。オルジャイト汗時代にも彼の活動は若干傳えられているが大きな活躍は見うけられない。彼はアブー・サイード汗時代の一二一九年、同族の *Irjinj* と共に反 *Chubān* の叛亂をおこして息子共々處刑され、以後ケレイト部族のこの系統の活動は見られない。

3 ウイグル部族：ガザン汗時代、シリア遠征に千人隊長として加わつた *Nāudār* の父は、アバカ汗の親衛兵からアルグン汗の側近となつて信任の厚かつた *Urduqaya* で、アルグン汗時代の末、クーデターを起したかつての同僚 *Tughachār*,

Qunchaqbal 等に殺された。ガゼン汗の即位後、彼の対立勢力討滅活動やシリア遠征に活躍した千人隊長 Puṣadqaya と兄弟の Qutluqbaya は Urdugaya の甥であり、ガゼン汗時代シリア遠征に加わった Tarmīz も同族のアミールであった。これら Urdugaya の一族が一連の政争の中心にあった Tughachar, Qunchaqbal と対立する立場にあったことは疑いなく、ウイグル部族のアミール達がホラサンから進軍してきた諸王ガゼンのもとに投じて仕えたことは間違いない。Zaidar がガゼン汗時代に支配した千人隊はウイグル、カルルクを主體とした「アゼルバイジャン軍政府」の「第三萬人隊」起源のものだが、ガゼン汗時代にタタール部衆が集められて再編成されたと同様に、フラグ汗時代に「第三萬人隊」が解體されて散り散りになっていたウイグル部衆がガゼン汗時代に集められ、彼のもとに來降して功のあった Zaidar, Puṣadqaya, Qutluqbaya, Tarmīz 等ウイグル部人に與えられたのであろう。彼らはオルジャイト汗時代、それぞれアミール第十八位、十七位、十六位に列されているが Puṣadqaya のアブー・サイド汗時代はじめの行動が知れる以外、彼等の具體的な活動は僅かにしか傳えられていない。

4 タングート部族…ガゼン汗時代に千人隊長となった Tughnīja は、諸王アルグンとアフマッド汗とが争った時アフマッド側について敗れた Aju Sukurchi の息子で、彼は Tughachar, Qunchaqbal とは対立する立場にあり、アルグン汗の歿後 Tughachar 等が諸王バイド擁立を計畫した時に諸王ガイハト支持にまわり、即位したガイハトに仕えた。ガイハト汗が諸王バイドに倒されるに及び、ホラサンから進軍してきた諸王ガゼンのもとに投じて仕えたと考えられる。Tughnīja のオルジャイト汗時代以降の活動は全く傳えられておらず、アブー・サイド汗時代のはじめ息子の Ghazān が Irinjin・Qurmshī の叛亂に連座してグルジスタンで處刑された後、タングート部人の活動は見うけられない。

5 スニート部族：「親衛カラウナス萬人隊」の第二代萬人隊長 Sunīai Nūyān の二人の息子 Tughai と Amkajin は諸王アルグンとアフマッド汗とが争った時アフマッド側につき、以後、彼等一族の名はガゼン汗時代 Amkajin の子 Buraighi とその子 Mikarīl が大輔官 (Idachi) として仕えたことが知れるまで全く史料中に見うけられない。政争に敗退して

アルグン汗時代以降振わなかった Sunīai の一族は、一二九五年、ホラサンから進軍してきた諸王ガザンのもとに投じて仕えるに至ったと考えられる。オルジャイト汗時代はじめの一三〇七年、ギーラーン征討戦で Būrahī の子 Jabrīl が戦死して以後、スニート部族のこの系統の活動は見うけられない。

5 その他…フラグ汗時代の一二六〇年、シリア作戦で戦死したナイマン部族の Kitbūqa Nūṣān の子 Sulṭān Yasaul はガザン汗時代、千人隊長としてシリア遠征に加わったが、それ以前の行動は伝えられていない。彼はオルジャイト汗時代はじめアミール第十二位に列されてホラサン地方に駐屯したが、アブー・サイード汗時代のはじめ敵軍に殺された。ガザン汗に宿營官 (Yurūchi) として仕えたコルラウト部族の Mazūq Yurūchi の一族はフラグ汗時代以来、宿營官として歴代イル汗に仕えたが、Mazūq Yurūchi がガザン汗に仕えた経緯は不明である。ガザン汗に飲膳官 (Shusūnchi) として仕えたサルジウト部族の Musalman Shūsūnchi についても同様である。チングス汗時代の親衛百人隊長、ドルバン部族の Bū-Batūchi の子 Palad Chinksānk はアルグン汗時代に元朝からイランに来て以来、一連の政争とはほとんど無關係に、アルグン汗、ガイハト汗、バイド汗、ガザン汗、オルジャイト汗の五君に仕え、ガザン汗時代には萬人隊長となり、オルジャイト汗時代のはじめにはアミール第三位に列された。オルジャイト汗時代の彼の行動は、一三〇七年ギーラーン征討戦の際に奥魯 (aghruq) の長を務めたことが知れるのみであり、一三二二年、彼が歿した後その後裔の活動は知られていない。

### 第三節 ガザン汗政權中核のアミール達とその一族達のガザン汗歿後の状況

第一節、第二節で述べてきたように、ホラサンからアゼルバイジャンに進軍して汗位についたガザン汗が、建國時以來アゼルバイジャン、ルム、グルジスタン等に據っていた諸部族のアミール達や諸王達を徹底的に討ってその軍隊を解體、改易した後のガザン汗政權を構成したのは、一、ガザン汗が幼少時代を過したホラサン地方において、父、諸王アルグン

に、「側近のアミール」、「師父」、「乳兄弟」、「オルド長」として仕えていた者達の後裔や一族達で、ガザンの幼少時代からその身邊にあった子飼いのアミール。二、幼少時代のガザンを己のオルドで養育したバヤウト部族の大 Bulghan Khatun の一族の者達や、大 Bulghan Khatun に「オルド長」、「家の子」として仕え、幼少時代からガザンの身邊にあった子飼いのアミール。三、ガザン子飼いのアミール達の一族で、諸王ガザンがバイド汗と對立してホラサンに進軍してきた時に來降して仕えたアミール。四、アバカ汗歿後の一連の政争の過程で一族の有力者が殺され、政争の中心にあった Tuglatchar, Qunchaqbal と對立し、ホラサンから進軍してきた諸王ガザンのもとに投じて仕えたアミール。五、元朝から來てアルグン汗以下歴代のイル汗に仕えたドルバン部族の Pulad Chinksank 等であるが、このうち、「萬人隊長」、「親衛千人隊長」、「邊境防備軍司令官」等の重要な地位についてイル汗國各地の支配にあったのはほとんど總てが、一及び二の、古くからホラサン地方にいたガザン子飼いの諸部族のアミール達に限られてしまう。彼等の他に若干の來降者達を中堅の千人隊長としてガザン汗政權が成立した。ここにイル汗國を支配するモンゴル諸部族の構成は大きく變化することになり、フラグの征服活動に従った諸部族軍がやむを得ずそのまま征服地に居ついて成立した分立的要素濃厚な征服國家イル汗國はガザン子飼いのアミール達を中核に若干の來降者達を中堅とする中央集權國家として出發することになったのである。

ガザン汗は一二九九年、ルムにおける Sultanish の叛亂を鎮定して對立勢力討滅活動を完了した後僅か四年半で歿し、政權は以前から後繼者に指名されてホラサン地方にいた腹違いの弟ハルバンダにほぼスムーズに繼承され、アゼルバイジャンに移った彼はオルジャイト汗として即位した。ガザン汗政權の中核を構成した萬人隊長、親衛千人隊長、邊境守備軍司令官、千人隊長や彼等の一族達はオルジャイト汗の即位によってその軍隊に特別の改變を受けることなく存続したはずである。ところが既に述べてきたように、ガザン汗政權中核のアミール達のオルジャイト汗時代、及びその息子アブー・サイド汗時代の目立った活動はあまり見うけられない。ガザン汗が歿して間もないオルジャイト汗時代のごく初期のアミール序列二十五位中、ガザン子飼いのアミールでその名が見える者達を挙げると、ガザン汗政權隨一の有力萬人隊長の Chit-



Ingushshah の筆頭が目立つが、彼はオルジャイト汗時代初期の一三〇七年、ギーラーン征討作戦中に戦死し、萬人隊長の支配権は第二位の Chubān の手に移つてゐる。Qutlughshah の他はガザン汗時代の千人隊長 Sitai (十位)、親衛千人隊長 Alghu (十三位)、萬人隊長 II Basmish (十四位)、萬人隊長 Aladu の子 Baktur (十五位)、Alghu の一族 Ramazān Gürkān (十九位)、ルム邊境軍司令官 Abishgha (二十位)、萬人隊長 Qutlughshah の子 Qarānjūq (二十位)、アッラー邊境軍司令官 Nurin Agha の子 Baidu (二十一位) で、いずれも十位以下である。彼等のうち十位に列された Sitai がオルジャイト汗時代に萬人隊長になり、アブー・サイード汗時代の末期まで活躍したのと、十三位に列された Alghu が兄 Taqtimur の後を受けてホラサン地方の萬人隊長となり、さらに諸王アブー・サイードの師父にもなつてアブー・サイード汗時代初めまでその活動が知れている以外はオルジャイト汗、アブー・サイード汗政權下兩汗に仕えての大きな活動は見うけられず、II Basmish, Qarānjūq, Baidu の具體的な行動は全く知られていない。ガザン汗政權中核の萬人隊長 Mutai, ケルマン・ファールス邊境軍司令官 Sadāq Tarkhan, 萬人隊長 Satalmish の一族に至つてはアミール序列二十五位中にその名を見出せない。ホラサンに進軍してきた諸王ガザンのもとに來降して仕えた者達のうち、前述の Chubān が第二位に列された以外ではウイグル部族の Puldaqaya, Qutlughdaya, Nauldar, Tarmīz が十六位から十八位に見うけられるが彼等の具體的な活動はごく僅かに傳えられているだけである。ガザン汗時代に千人隊長となつたケレイト部族の Qurnshi やタングート部人 Tughūlja の名は二十五位中には見當らない。第三位の Pulad Chinksank はアルグン汗時代に元朝からやつてきて歴代イル汗に仕えた「別格」の人物である。結局、ガザン汗政權中核のアミール達のうち、オルジャイト汗、アブー・サイード汗政權下、アミール序列のかなり上位にあつて、兩政權下における一貫した活動が見うけられるのは、ガザン子飼いのアミールの一族で來降してガザン汗に仕え、萬人隊長となつたスルドス部族の Chubān の一族と、ガザン子飼いの親衛千人隊長、バヤウト部族の Alghu の一族とナクズ部族の千人隊長 Sitai の一族だけである。ガザン汗からオルジャイト汗への政權移行は大きな政治的對立もほとんどなくスムーズになされたが、ガザン汗政權

中核のガザン子飼いのアミール達やその後裔達の、オルジャイト汗、アブー・サイード汗と密着した活動はごく僅かしが見うけられない。さて、それではオルジャイト汗の即位以後、政權の中核にあったのは何者なのであろうか。

### 第三章 オルジャイト汗政權、アブー・サイード汗政權中核のアミール達

#### 第一節 アミール序列の上位にある諸部族のアミール

オルジャイト汗時代、アミール序列の特に上位にあり、その後もアブー・サイード汗時代に至るまで兩政權の中核として活躍した各部族のアミール達を列挙すると以下ようになる。

1 ジャライル部族・チンギス汗時代の Juchi Tarmala (拙赤塔兒馬剌) の後裔 Husain Gurkan がアミール第四位に列されてオルジャイト汗時代、アッラーン方面の支配にあたり、いとこの Tughan が第八位に列され、萬人隊長としてバグダードの支配にあたった。Juchi Tarmala の後裔達のイル汗國における活動は建國時から顯著で、彼の子 Ilkai Nūyān はフラグの征服活動に従い、アバカ汗時代のはじめには諸オールドの長 (amir-i urdūna) を務めた。その息子 Shikūr もフラグの征服活動に活躍した後、アバカ汗、アフマッド汗の擁立に關係し、ガイハト汗時代に萬人隊長になるなどしてバイド汗時代に歿するまでアゼルバイジャンにおける最有力アミールの一人であった。彼の弟 Aqbūga はガイハト汗の娘を娶り、ガイハト汗政權の有力アミールとなったが、一二七七年、マムルーク朝のバイバルスの急襲を受けて戦死した。と Tūghū はアバカ汗時代ルムの萬人隊長となったが、一二七七年、マムルーク朝のバイバルスの急襲を受けて戦死した。バイド汗時代までにフラグに同行してきた Ilkai Nūyān の息子達がほとんど歿した後、ガザン汗時代には Urqu の子 Egbal が叛亂をおこして處刑され、Juchi Tarmala の後裔達はガザン汗政權下以前のような強盛を誇れる状況ではなかった。前述の Aqbūga の子 Husain Gurkan や、Tūghū の子 Tughan のガザン汗時代の活動はほとんど傳えられておらず、

Husain Gürkân がホラサン地方にいたことと、シリア遠征に加わったことがごく断片的な記事中に見られるだけである。ただ、「部族考」中には彼らの一族 Abu Bakr と Timurbuga がガザン汗時代、ホラサン地方において千人隊長、箭筒士として、ガザンの後継者に指名されていた諸王ハルバンダ(後のオルジャイト汗)に仕えていたことが伝えられている。Husain Gürkân の例と考え合せて、ガザン汗時代に Jachi Tarmala の後裔達がホラサン地方の諸王ハルバンダの身邊にかなり多くいたことが窺われる。オルジャイト汗時代アッラーン方面にいた Husain Gürkân はアブー・サイード汗時代も有力で、ホラサン地方で叛いた Bakūt を制壓するために派遣され、一三三二年當地で歿した。その子 Husain Buzurg はアブー・サイード汗歿後の諸勢力抗争の中心にあつてジャライル朝を開き、息子 Shaiikh Uwais がスルドス部族の Chubân の後裔達を破つて最終的にアゼルバイジャンを確保した。

2 チャガンタール部族<sup>(2)</sup>・オルジャイト汗時代アミール第七位に列された Isangutluğ はオルジャイト汗の息子 Baya-zid の後見役をつとめ、一時ホラサン地方の支配にあたり、アブー・サイード汗時代の初期に歿するまで、オルジャイト汗、アブー・サイード汗政權の有力アミールであつた。Isangutluğ の兄弟 Kurbuga Bahadur はオルジャイト汗時代アミール第十一位に列され、ルム、ディアール・バクルの萬人隊長となつた。Kurbuga Bahadur はアブー・サイード汗時代の一三一九年、Irinjin・Qurmshî の叛亂事件に絡んでルムで殺されたが、Isangutluğ の息子 Qar-Takal は諸王アブー・サイードのホラサン行きに同行し、別の息子 Mahmud や Ai Malik の活動はアブー・サイード汗歿後の諸勢力抗争の時代までに及んでいる。Ai Malik がスルドス部族の Malik Ashraf に殺されて以後この部族の活動は見うけられなくなる。Isangutluğ と Kurbuga Bahadur のオルジャイト汗時代以前の行動は僅かにしか知られておらず、Isangutluğ がガザン汗時代ホラサン地方で諸王ハルバンダと共に行動していたことと、Kurbuga Bahadur がガザン汗時代にシリア遠征に加わり、ルム地方に駐屯していたことが知れるだけである。また、一族の Duladai Idachi はもとアバカ汗の親衛兵で、アバカ汗の歿後 Tughachar, Qunchaqbal とはば行動を共にして一連の政争の中心にあり、最後はバイド汗に仕え

て諸王ガザンと對立し、杖刑に處されてホラサンに送られたが、ガザン汗時代以後まで當地で活動した。

3 ケレイト部族・チングス汗に滅ぼされた *Unk Khan* (王罕) の曾孫 *Irinja* はオルジャイト汗時代アミール第六位に列されてルムの支配にあたり、アブー・サイード汗時代のはじめにはディアル・バクルの支配者となった。*Unk Khan* の後裔のイル汗國における具體的な行動は、ガイハト汗時代の末に *Irinja* がガイハト汗打倒をはかる諸王バイドと結ぶまで全く見うけられない。*Irinja* はバイド汗を倒して即位したガザン汗とは對立する立場にあったと思われ、ガザン汗時代の彼の活動はほとんど知られていないが、シリア遠征に参加したことが傳えられている。アブー・サイード汗時代の一三一九年、*Irinja* はスルドス部族の *Chuban* と對立して同族の *Qurmash* 等と共に叛亂を起し、息子共々處刑され、以後ケレイト部族の活動は見うけられない。

4 ウイグル部族・オルジャイト汗時代、アミール第五位に列されてバグダードの支配にあたり、さらにオルジャイト汗の息子アブー・サイードの師父としてホラサンへ派遣された *Sivinj* は、もとはホラサン地方にあつて諸王ハルバンド(後のオルジャイト汗)に師父として仕えたウイグル人であり、*Sivinj* の父 *Shishi Bakshi* もアフマッド汗時代、ホラサン地方においてハルバンドの父、諸王アルグンに仕えていたことが知られている。*Sivinj* のガザン汗時代の具體的な活動はシリア遠征に加わったことが斷片的な記事から知れるのみだが、オルジャイト汗時代以後はアブー・サイード汗時代のはじめに歿するまで特に有力なアミールの一人であった。彼の兄弟の *Akranj* の活動はアブー・サイード汗歿後の諸勢力抗争の時代にまで及んでいる。

5 オイラート部族・*Qutuqa Biki* (忽都合別乞) の一族、ギョク汗女婿の *Tinkiz Gürkân* の孫 *Chichak Gürkân* はガイハト汗時代の末、諸王バイド擁立に働き彼の即位を實現させたが、ホラサンから進軍してバイド汗を倒した諸王ガザンに杖刑に處され、ホラサンに送られた。しかし、ガザン汗時代、シリア遠征に際して千人隊長として登用され、オルジャイト汗時代の重要作戦にも加わった。彼の息子 *Ali Padeshah* や *Muhammad* のオルジャイト汗、アブー・サイード汗

時代の活動も知られている。‘Ali Padeshah がアブー・サイード汗歿後の諸勢力抗争の中でジャライル部族の Husain Buzurg に殺されて以後、オイラート部族のこの系統の活動は見うけられない。

以上のようにガザン汗歿後のオルジャイト汗政權、アブー・サイード汗政權の中核にあったのは第二章で觸れたスルドス部族の Chubān (二位) の一族やナクズ部族の Surāi (第十位) の一族、バヤウト部族の ‘Alghu (第十三位) の一族の他、ジャライル部族の Husain Gürkān (第四位) ‘Tughān (第八位) ‘Chaghan Tatar 部族の Isangutluḡ (第七位) ‘Kurbūqa Bahadur (第十一位) の兄弟、ケレイト部族の Irinjīn (第六位) ‘Uigul 部族の Sivinj (第五位) ‘Oйлат 部族の Chichak Gürkān, ‘Ali Padeshah 父子等とその一族達であったが、Husain Gürkān 以下のこれらのアミール達の具體的な活動が見られるのはガイハト汗からバイド汗さらにガザン汗へと政權が移動した一二九五年以後のことであり、Chichak Gürkān や Irinjīn はバイド汗に仕え、ホラサンから進軍してきた諸王ガザンとは敵對關係にあった。Isangutluḡ や Kurbūqa Bahadur と同族の ‘Amīr Dūladai ‘Idachi はバイド汗に仕えて諸王ガザンに對抗し、杖刑に處されてホラサンに送られた。Husain Gürkān の一族 ‘Eqbal はガザン汗の即位後叛いて處刑されている。ホラサンから進軍し、バイド汗を倒して汗位についたガザン汗はアゼルバイジャンその他の地にいたフラグ汗以前の傳統を有する舊勢力や、フラグ遠征軍起源の諸部族に對して峻嚴極まりない姿勢で臨み、たとえ己のもとに降ってきた人物といえども過去にイル汗に對する反抗や裏切りの前歴があった者は許さず徹底的に滅ぼしていった。こうした中であつて、ガザン汗政權下にかつての敵對者やその一族達が存続したのは極めて異例のことである。さて、それでは、ガザン汗の即位時前後までその活動が全く知られていなかった者達が、ガザン汗の敵對者やその一族であるにもかかわらずガザン汗政權下に組み込まれ、何故オルジャイト汗時代に政權中核の高位の ‘Amīr として突如擡頭し、續くアブー・サイード汗時代からその歿後に至るまで強力であつたのであろうか。そしてガザン汗政權中核の ‘Amīr 達やその一族達のガザン汗歿後のオルジャイト汗、アブー・サイード汗政權下における兩汗と密着した活動があまり見うけられないのは何故であらうか。こ

の問題を明らかにするためにオルジャイト汗、アブー・サイード汗と兩政權中核の諸部族のアミール達との個人的關係についてさらに知らねばならない。

## 第二節 オルジャイト汗政權、アブー・サイード汗政權中核のアミール達と兩汗との個人的關係

既に述べてきたように *Sivini* はオルジャイト汗がホラサン地方にいた諸王ハルバンダ時代の師父であり、*Isangutluḡh* はガザン汗時代ホラサン地方にあって諸王ハルバンダに従って行動し、ガザン汗時代ホラサン地方にいた *Husain Gürkān* も一族の *Abū Bakr* や *Timurbuqa* 同様、諸王ハルバンダに仕えていたと考えられた。*Sivini* はオルジャイト汗時代、諸王アブー・サイードの師父ともなり、*Isangutluḡh* はオルジャイト汗の別の息子、諸王 *Bāyazīd* の後見役ともなった。彼等はホラサンにいた諸王ハルバンダ時代からオルジャイト汗に仕えていた者達であったが、彼等のみならず、オルジャイト汗、アブー・サイード汗時代、兩政權の中核を構成した各部族のアミール達のほとんどが兩汗とさらに強い個人的結びつきを持っていた。それは兩汗との姻戚關係である。即ち、ジャライル部族の *Husain Gürkān* はオルジャイト汗の義父にして義兄、ケレイト部族の *Irīnjān* はオルジャイト汗の義父、オイラート部族の *Chichak Gürkān* はオルジャイト汗の義父、息子 *‘Alī Pādešāh* はアブー・サイード汗の伯父、スルドス部族の *Chubān* はオルジャイト汗の女婿であった。またチャガンタール部族の *Isangutluḡh* の孫娘 *Chichak Gürkān* の姪 *Chubān* の娘と孫娘がそれぞれアブー・サイード汗の妃となっている。これらの諸部族のアミール達は、圖にも見られるように、たまたまオルジャイト汗や息子のアブー・サイード汗と姻戚關係が生じたのではなく、その祖や一族とフラグ家との間に以前から續いていた姻戚關係の延長上にあった。そしてこの姻戚關係の大部分は、モンゴル帝國草創期からチングス汗一門とこれら各部族との間に一貫して續いてきた姻戚關係の延長上にあるものであった。<sup>(3)</sup>つまり、オルジャイト汗時代以後、政權の中核にあったのは、ガザン汗によって後繼者に指名されてホラサンにあった諸王ハルバンダと姻戚關係を中心とする個人的繫りを持つアミール

図表Ⅰ ガザン汗時代までに滅ぼされた諸部族

部 族 名	モンゴリア、 西方出先機 関の祖		フラグ家との姻戚関 係 フラグ汗からガ ザン汗まで ( )内はオルジャイト 汗以後	アバカ 汗没後 の政争 で殺さ れた者	ガザン汗の 即位時前後 のアミール		職 掌
バーリン	Qara Nuyan	H			Tughachar	×	親衛カラウナ ス万人隊長
オンギラート	特 薛 禪	H	●●●●	●●●● ○○○○	Qunchaqbal	×	親衛千人隊長
			●	●●	Musa Gürkān	×	
スニート	綽 兒 馬 罕	A			×	Baighut	×
	帖 木 迭 兒					Buqdar Akh- tachi	□
ベスート	哲 別	A				Sulamish	×
		H			×	Shanqasun	□
ジャライル	(Buqa)				×× ×	'Aina Bik	×
オルクヌート	輕 吉 牙 歹	A				Barula	×
オイラート	忽都合別乞		●●●○	●●●●● ○○○		Tarqai Gur- kān	×
	Arghun Aqa		●●●	(●)		Naoruz	×
ジャライル	忙 哥 撒 兒				×	Timur	□ ×
イルドルキン	(Hindu Bukchi)	H			×		
コンゴタン	蒙力克額赤格					Tudaju Yar- ghuchi	□
ウリヤンカン	者 勒 蔑					Sarkis	×
ケレイト	(Buqu)		●○			Ghazan	×
アルラト	博 爾 朮	A			×	Tokal	×
ジャライル						Tanji	×
ジャライル	木 華 黎				×?		

H : 「ヒンドゥスタン・カシミール鎮守府」起源の軍隊の支配者

A : 「アゼルバイジャン軍政府」起源の軍隊の支配者

× 殺された者

□ ガザンのもとに降参し、以後の行動が知られていない者

オルジャイト汗、 アブー・サイド ド汗時代のアミ ール	オルジャイト 汗時代初 期のアミ ール序列		職掌	オルジャイト汗、 アブー・サイド 汗との姻戚関係 A		アブーサイド汗 没後のアミール
Qutlughshah	1位	×	万			
Tughai Gurkan						
Il Basmish	14位					
Ramazān	19位					
Algha	13位	※	万、師			Artūqshāh
Baktūt	15位	×	万			
Abishqa	20位	×	万			
Bāido	21位					
Sutai	10位	※	辺			lbrāhīmshāh
					●	
Chuban	2位	※	万	●●●	●●●●●	Ḥasan Kuchek
Qūrmshī		×				
Sulṭan Yasāul	12位	×				
Sivinj	5位	※	師			Akranj
Nauldar	18位					
Poladqaya	17位					
Qutlughqaya	17位					
Tarmtāz	16位					
Ghāzān		×				
Jabril		×				
Ḥusain Gurkan	4位	※	辺		●	Ḥasan Buzurg
Tughān	8位	※	万			
Kurbāqa Bahādur	11位	※	万		●	Maḥmūd Ḥsanqutlugh
Ḥsanqutlugh	7位	※				
Ḥrīnjīn	6位	※×	辺		●	
‘Alī Pādeshāh		※			●●●●	‘Alī Pādeshāh
Polad Chinksānk	3位	※				

× 殺された者

× 戦死した者

万 万人隊長

千 千人隊長

親 親衛千人隊長

辺 辺境軍司令官

師 師 父



図表Ⅱ ガザン汗時代以後の諸部族

部 族 名	モンゴリア、西方 出先機関の祖 ( )内はイル汗国 の祖	フラグ家との姻戚 関係 ガザン汗時代まで A B	ガザン汗即位 時前後のアミール		職掌
マ ン グ ト	者 台	(●●)	Qutlughshah	★	万
バ ル ク ト	合 荅 安	(●○)	Satamish	★	万
ウ リ ヤ ン カ ン	速 不 台	(●)	İl Basmish	★	万
バ ヤ ウ ト	(Noqai Yanghuchi)	●●●●	Tuqtimur	★	万
		○○	Alghu	★	親
ク イ ン タ タ ル		(●)	Mulār	★	万
ト カ リ ウ ト タ タ ル	撒 里	〈●〉	Aladu	★	万
	Qutuqta	●●	Abishqa	★	辺
オ ロ ナ ル	巴 歹 乞失里克		Sadaq Tarkhan Aghutai Tarkhan	★	辺 千
ジ ャ ラ イ ル	巴 刺		Nurin Aqa	★	辺
ナ ク ズ	納隣脱斡哩勒	(●)	Sotai	★	千
ジ ャ ラ イ ル	Sapa		Qachar	★	千
ス ル ド ス	鎖兒罕失刺	●●○		■	万
ケ レ イ ト	Quidu	●●	Qurmshī	■	千
ナ イ マ ン	(Kitbuqa Nuyan)		Sultan Yasaul		千
ウ イ グ ル			Sivinj Naoldar Puladqaya Qutlughqaya Tarmtaz	■ ■ ■	師 千 千
タ ン グ ー ト	(Aju Sukurchi)		Tughrilja	■	千
ス ニ ー ト	Sunitai		Buralghi	■	
ジ ャ ラ イ ル	拙赤塔兒馬刺	●○	Husain Gorkan	⊗	
チャガンタタル		●●●●	Kurbqa Bahadur Isanqutlugh	⊗	
ケ レ イ ト	王 罕	●	İrinjin	⊗	
オ イ ラ ー ト	(忽都合別乞)	●○○	Chichak Gorkan	⊗	
ド ル バ ン	Burki Baurchit		Pulad Chinksank	■	万

● 姻戚関係があった者

( ) 一代限りの者

○ レヴィラート婚による者

〈 〉 他系統の者

A フラグ家の娘を娶った者

B 一族の娘をフラグ家に嫁がせた者

★ ガザン汗子飼いのアミール

■ ガザンのもとに降参して仕えたアミール

⊗ 自身あるいは一族の者がガザンに反抗したが許されたアミール

※ オルジャイト汗、アブー・サイード汗政権中枢のアミール

達とその後裔達、一族達であったのである。ガゼン汗時代、中堅の千人隊長であったウイグル部族の *Puladqayā*, *Qutulugh-qayā*, *Nāuldar*, *Tarmtāz* 等がオルジャイト汗時代にアミール序列の十六位から十八位に列されたのは、同族の *Sivinj* の擡頭と呼應するものであった。

一方、ガゼン汗政權中核のガゼン子飼いのアミール達も少なからぬ者達がフラグ家と姻戚關係を有していたが、これらはホラサン時代からガゼンを助けてその即位に貢献した彼等がガゼン汗の即位後に恩賞としてフラグ家の娘を與えられたほぼ一代限りのもので、イル汗國成立時以前からチングス汗一門との間に續いていた姻戚關係の延長上にあるものではなかった。ガゼン汗子飼いのアミール達のうち、以前のフラグ家との一貫した姻戚關係を持っていたのはバヤウト部族のみであったが、ガゼン汗時代に親衛千人隊長であった *Alghu* はオルジャイト汗時代以降、兄 *Tüqümür* が支配していたホラサンの萬人隊を受け繼いで諸王アブー・サイードの師父ともなり、他のガゼン汗子飼いの諸部族のアミール達と比べてオルジャイト、アブー・サイード兩汗と密接な關係を保持していた。ガゼン子飼いの *Aladu*, *Abishqa* 兄弟のトトカリウトタール部族はガゼン汗時代以前からフラグ家と姻戚關係を持っていたが、姻戚關係があったのは *Aladu* 兄弟とは別系統の者達であった。諸王ガゼンのもとに來降し、オルジャイト汗時代以後特に強力になった *Chubān* のスルドス部族も古くからフラグ一門と姻戚關係を有する部族であった。モンゴル帝國草創期に遡るイル汗國建國時以來のフラグ一門との姻戚關係を持たない、ガゼン汗政權中核のガゼン子飼いの諸部族のアミール達の大部分は、ガゼン汗個人との全く個人的な結びつきに終始し、ガゼンと同じアルグン汗の息子でも、腹違いの弟ハルバンダと強く結びつくことはなかったのである。ガゼン汗が分立、抗爭を繰り返す諸部族軍を解體、改易してイル汗國を征服國家から中央集權國家に脱皮させた後、最終的にイル汗國の中核となり得たのは、ガゼン汗の峻烈な對立勢力討滅活動の中にあつて、フラグ家との一貫した姻戚關係を持っていたオイラート部族、オンギラート部族、タタール部族、ケレイト部族、スルドス部族、バヤウト部族、ジャライル部族等の特定部族のうち、ガゼン汗の後繼者、諸王ハルバンダの姻戚という理由で辛うじて存続したが、

ガザン汗政權下ではあまり目立った活動が見られなかった數部族のアミール達やハルバンダの師父の一族だけだったのである。

## 結 び

一二九五年、ホラサンからアゼルバイジャンに進軍して汗位についたガザン汗は長らく政争の中心にあった「ヒンドウスタン・カシミール領守府」、「アゼルバイジャン軍政府」、「ホラサン總督府」等のモンゴル帝國の西方出先機關起源の萬人隊、千人隊の支配者達やフラグ遠征軍起源の萬人隊、千人隊の支配者達を徹底的に討つてその軍隊を解體、改易し、これらの軍隊の支配者達と結んで汗位を狙ひうる諸王達をもこの間に大部分を殺した。一二九九年、ルムの萬人隊長 *Sultanish* が處刑されると、ガザン汗に對抗できるアミールは誰もなく、汗位を望める有力な諸王といえは後繼者としてホラサンの支配にあつた腹違いの弟ハルバンダ以外にもはや存在しなかつた。ガザン汗によつて建國時以來のモンゴル系、トルコ系諸部族軍が徹底的に解體、改易された後、再編成されたイル汗國各地の萬人隊、千人隊、邊境守備軍を支配してガザン汗政權の中核を構成したのはほとんど總てがホラサン地方その他東方地域にいたガザン子飼いのアミール達であり、この他に若干の來降者達とガザンの後繼者、弟ハルバンダと個人的結びつきを持つ者達が中堅のアミールとして政權下に加えられていただけであつた。ここにイル汗國はフラグの征服活動に従つた諸部族軍がやむを得ずそのまま居ついて成立した征服國家から中央集權國家へと生れ變り、以後はもはや對抗者もないフラグ家正統の諸王をイル汗に戴き、これと個人的關係で結びついている諸部族のアミール達が政權の中核を占める安定した國家として出發することとなつた。そして、ガザン汗が對立勢力討滅後四年半で歿するとガザンとの全く個人的關係で結びついていたガザン汗政權中核のガザン子飼いのアミール達やその一族達は、ガザン汗に續いて即位した腹違いの弟オルジャイト汗をイル汗國における最高君主に戴いてはいたが<sup>(4)</sup>特別の強い繋りは持たず、ガザン汗時代の本據地を確保するに留まつた。そして、アブー・サイード

汗時代に入ると彼等一族は次第に自立的傾向を強めていき、ある者は叛いて討たれ、ある者はガザン汗時代の本據地において新たな躍進の基盤を持たないまま弱體化してしまつた。ガザン汗の歿後、政權中核のアミール達が己の本據地に退いた後、ガザン汗の中央集權國家體制を踏襲するオルジャイト汗政權中核のアミールとして國政の表面に大きく進出してきたのは、ガザン汗の峻烈極まりない對立勢力討滅活動の中であつて、後繼者ハルバンダとの姻戚關係により辛うじて存続した數部族のアミール達とハルバンダの師父の一族達であつた。これらオルジャイト汗との個人的繋りが強い各部族のアミール達やその一族達はガザン汗の歿後からアブー・サイード汗時代に至るまで、途中の内紛を経ながらもまだまだ十分強力であつたが、アブー・サイード汗が歿してフラグ家の正統が絶え、統合の中心が失われるとイル汗國という統一體は一氣に崩壊してしまい、フラグ家姻戚のアミール達はフラグ家やチングス汗一門遠縁の諸王達を傀儡として争つたが、もはやチングス汗一門を汗に戴く統一國家は生れなかつた。建國時の事情に根ざす分立的體質濃厚な征服國家イル汗國がガザン汗によつて中央集權國家へと脱皮した後もイル汗と政權中核のアミールとの關係は個人的結びつきによる部分が多く、最終的にイル汗國の中核を構成することとなつたフラグ家姻戚の特定部族のアミール達の大部分はフラグ家正統の斷絶と共に内部抗争の末、消滅してしまつたのである。

中央集權國家への脱皮をはかるガザン汗の一連の對立勢力討滅活動はモンゴル人達がイランにおいて生き残つていくための唯一の道ではあつたが、統合の中心となる多くの諸王達や分立する強力な諸部族軍を徹底的に滅ぼさざるを得なかつたことは、モンゴル人達の補給がきかないイル汗國にとつて、「統一」「中央集權化」とは裏腹の一面の弱體化をも必然的にもたらしこととなり、中央集權國家に生れ變つたイル汗國を比較的短命に終らせることになつた。しかし、ガザン汗が斷行した中央集權的諸改革の成果は、オルジャイト汗、アブー・サイード汗に繼承された後、イル汗國崩壊後の混亂の中から他勢力を破つてアゼルバイジャンを支配したジャライル朝に結實しており、イランにおけるモンゴル國家という觀點からはガザン汗の即位時からジャライル朝の滅亡時までを一續きのものとして捉えることができよう。ジャライル朝の

中核となったジャライル部族の Juchi Tarmala の後裔とフラグ家との姻戚関係が生じたのはフラグの孫ガイハトとの姻戚関係が最初で、ガゼン汗、オルジャイト汗と続いたがそれ以前ジャライル部族のこの系統とチンギス汗一門との姻戚関係は全くなかった。ガゼン汗歿後、イル汗國の中核にあったのはいずれもモンゴル帝國草創期からの一貫したチンギス汗一門との姻戚関係を持つ諸部族であり、「チンギス汗一門と一貫した姻戚関係を持つ部族」という点では Juchi Tarmala のジャライル部族はイル汗國中期に姻戚関係が生じた例外的な「新興勢力」であった。フラグの征服活動に従ってそのまま征服地に居ついたモンゴル系、トルコ系諸部族はガゼン汗によって徹底的に解體、改易されてガゼン汗及び弟ハルバンダとの個人的繋りを持つ者達のもとに再編成され、さらにイル汗國の中核はフラグ家姻戚の諸部族にほぼ限られ、最終的にはガイハト汗以降にフラグ家との姻戚関係が生じた Juchi Tarmala の後裔ジャライル部族がイル汗國崩壊後他勢力を壓倒してガゼン汗が目ざした中央集權的諸改革を開花、結實させたのである。

## 註

- (1) イル汗國におけるモンゴル諸部族の消長について發表したのは以下のものである。一、『Il Khan 國史料に見られる Qarātūnas とくつ』、『東洋學報』五四—一、一—七二頁。一九七一年。二、『Il Khan 國史料に見られる Qarātūnas とくつ』、『アジア文化史論叢』第三卷、一—六二頁。山川出版社。一九七九年。これは一に若干の手なおしをしたものである。三、『The Qarātūnas in the Historical Materials of the Ilkhanate』(Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko No. 35, pp. 131—181, 1977) といふ二の英譯版である。四、『Ghazan Khan 政權の中核群とくつ』、『アジア・アフリカ

言語文化研究』第十八號。五六—一五〇頁。一九七九年。五、『Il Khan 國成立後の『Aqcherbatjan 軍政府』起源の軍隊について』、『アジア・アフリカ言語文化研究』第十九號。一五—四八頁。一九八〇年。六、『Ghazan Khan 歿後の Il Khan 國におけるモンゴル諸勢力の消長について』、『アジア・アフリカ言語文化研究』第二二號。七四—一〇〇頁。一九八一年。七、『イル汗國史上におけるフラグ家姻戚の有力諸部族』(『内陸アジア・西アジアの社會と文化』、六六七—六九五頁。山川出版社。一九八三年)。これらに本稿を加えて増補し、近い將來一冊にまとめて出版する豫定である。本稿で觸れる諸問題の具體的な考證過程はこちらを参照していただきたい。

- (2) 註(1)の七の論文において Isangulugh がオルジャイト汗の「女婿」(六七九頁)としたが、「息子の後見役」と訂正する。
- (3) これについては別の機會に述べるつもりでいる。
- (4) 一三一三年、ホラサンに向った幼少の諸王アブー・サイードと共にガザン汗政權中核のガザン子飼いのアミール達の息子達が多數同行しているのが伝えられている。
- (5) ガザン汗の改革の成果の一端については本田實信教授の「ジャライル朝のモンゴル・アミールに就いて」(『内陸アジア・西アジアの社會と文化』、山川出版社。一九八三年。六九六―七四頁)及び、「モンゴルの遊牧的官制——ユルトチとブラルクチ——」(『小野勝年博士頌壽記念東方學論集』、朋友書店。一九八二年。三五九―三七五頁)に記されている。

## THE SYSTEM OF HEREDITARY OFFICIALS IN THE TIANMING 天命 ERA

MATSUURA Shigeru

The so-called system of *shizhi* 世職 is a system of hereditary officials peculiar to the Qing dynasty. It originated in the 5th year of Tianming (AD 1630) with the establishment through Nurhaci (Emperor Taizu 太祖) of the following military ranks: *zongbingguan* 總兵官, *fujian* 副將, *canjiang* 參將, *youji* 遊擊, as well as *beiyu* 備禦. First Nurhaci had given such appointment to *ambasa* and *niru-i-ejete*, his influential vassalls, whom he had ordered to live in the capital. They were granted exemption from grain tax as well as immunity of punishment because of their particularly meritorious service and excellent faculties. They were also permitted to hand down their special privileges to their sons and grandsons. Thus their position was mainly based on merit, however, should one of them commit a serious blunder, position and privileges were easily withdrawn.

This organization of military officials has frequently been confused with the "eight banner system" 八旗制度, but in fact these are two coexisting independent forms of organization. After the Tianming era, the system of hereditary officials (*shizhi*) has been given different names time and again. In the 1st year of Qianlong 乾隆 (1736), it was finally called the Five Ranks of Nobility 五等爵 of ancient Chinese tradition.

## THE MONGOLS UNDER THE ILKHANATE

SHIMO Hirotoshi

In the middle of the 13th century, many tribal armies left over from the conquering activities of Chinggis Khan's grandson Hūlāgū as well as troops from the Western outposts of the Mongolian empire took over the conquered territory—with Iran as its center—as it was and, for a variety

of reasons, established the Ilkhanate. These units which stood in no close direct relation with the ruling family of Hūlāgū engaged in constant fighting related to the succession of the position of the Khān. In 1295, Hūlāgū's great-grandson Ghāzān used his fief Khurāsān as a base and invaded Ādherbaijān. Taking the position of Khān, he thoroughly eliminated all segregating troops and in a sweeping reform instituted a new structure of power with amīrs raised from infancy as its mainstay. Thus the Ilkhanate was transferred from a conquering into a centrally organized state.

After the death of Ghāzān Khān, the clans of his half-brother Ūljāitū Khān became very influential. Then after the death of Abū Sa'id Khān the lineage of Hūlāgū's family ceased, and with this the Ilkhanate lost its unifying center of power and fell apart. From the ensuing fights of the various tribes the Jalāir clan emerged as the ruling family of Ādherbaijān. They continued the various centralizing reforms initiated by Ghāzān Khān, which then came to flourish fully.